冬の樹の花・ビワ（枇杷）

田中　潔

冬の樹の花の代表は、枇杷（ビワ）である。山茶花（サザンカ）、八手（ヤツデ）、あるいは、蝋梅（ロウバイ）をあげる人がいるかもしれない。これらの中で、一番雅趣が深いのは枇杷だと思う。11 月から咲き始め、大寒を耐え、立春の頃まで咲いている。

数年前まで勤めていた団体のオフィスは、東京都千代田区の番町小学校前にあった。この番町・麹町あたりで、枇杷の花の写真を撮ろうと歩き回ってみた。枇杷の木はたくさんある。ところが、花は高い位置にあり、小型のデジカメでは勝負にならない。東郷公園で、千代田区のお知らせ看板を伝って、柵によじ登り、木登りもして、ようやくものにした。路上へ張り出した枝の下を人が通る。樹上の狼藉に気付く人はいない。

花房はどっしりとした円錐花序。70～100 個の花をつける。一つひとつの花径は１㎝。クリーム色を帯びた白い花弁。花はビロード状の、茶色の軟毛が密生する防寒コートにくるまれている。

真冬に咲く枇杷の花は、用意周到な受粉戦略を準備する。花期を長くし、多量の蜜を蓄えて、鳥と虫の来訪を待っている。冬の間の鳥や蜂にとっては、ありがたい蜜源植物である。その結果、受粉率は高い。枇杷の露地物の旬は６月。花が咲いてから収穫まで、摘房・摘蕾・摘果という作業を繰りかえして、成り過ぎを押さえないと、果実が小さくなってしまう。

初夏の到来を告げる枇杷は、のどをうるおすのに好適な果物である。温室栽培による、早期出荷が増えている。作業量が多いので、少しでも早く出して、収入を上げなければならない。

枇杷には大きな種子がある。食べるところが少なくて、だまされた、と思う人もいるらしい。それに応えて、「種なし枇杷」も作出されている。果実全体で、食べられる部分が 90%を超えるそうだ。しかし、枇杷には、大きな種子があるから、あの味があるのではないか。つややかな種子は、何日かポケットに入ったままになっている。そのまま捨ててしまうには惜しいものだ。誰でも、庭に蒔いてみたくなる。番町・麹町にあった多くの枇杷の木は、食べた後に残った種子を蒔いたものではないか。

写真―１　ビワの花

昔から、枇杷の木のある家は、病人が出ると嫌われる。常緑の大きな葉をたくさんつけ、主軸よりも側枝の方が伸長するので、こんもりとした樹形になる。そのため、家の中の日当たりが悪くなる。「病人が絶えない」という言い伝えは、種子を蒔こうという子供に、母親が「だめ」という時に使う、言い訳でもあったのだろう。大木の枇杷を許容する、広い庭の家など、めったにない。

ところが枇杷の葉は、薬用としての利用も盛ん

だった。江戸時代には、「枇杷葉湯売り」という商売があった。大きな黒い箱を二つ、天秤棒でかついだ。片方に釜と薬罐を入れ、枇杷の葉に肉桂や甘草などをまぜ、道端で煎じて飲ませた。暑気あたりの薬だった。今風に言えば、熱中症の薬。水分補給に不可欠だったのだろう。また、枇杷の葉は、浴料として皮膚を滑らかにし、アセモ、湿疹にも効果がある。

枇杷は、中国南部と日本の暖帯に自生する。とくに石灰岩地に多い。しかし、在来種の果実は小さいものだった。江戸の天保年間に、中国から持ち帰った種子を、長崎県茂木に植えたところ、品質の良い果実を得た。それが「茂木枇杷」である。さらに、明治になって、田中男爵が、長崎から導入した系統が、現在の千葉県の優良品種「田中枇杷」である。少し古い統計によるが、「長崎県の茂木」と、「千葉県の田中」の２品種で 95%を占めるとある。

写真―２　ビワの果実

目黒区駒場の「日本民藝館」の庭に、大きな枇杷の木があった。1964 年 12 月 16 日と、1965 年１月９日、立て続けに、おなじ人と、枇杷の花を見に行った。約 50 年も前の話である。その頃は、かなり詳細な植物暦を作っていたので、日付まで分かるのだ。「枇杷の花を見に行こう」という誘い文句で、よくつきあってくれたものだ。この 50 年、誘い文句には、何ら工夫が見られない。「花を見に行こう」のワンパターンである。その結果、今は、常に一人で花の写真を撮っている。

「全国植樹祭」という行事は、１年ぶりに色々な人に会えるので、楽しい。それに、天皇皇后両陛下をお迎えしての、前夜祭のレセプションは、主催県が、特産品の食材を、目一杯の力を入れて集めるので、舌の方も満足できる。ドレスアップをした女性達もきれいだ。

2002 年の全国植樹祭は、千葉県木更津が会場だった。開催日は５月 18 日。千葉県の名産といえば枇杷である。宴会場には、期待どおり、山盛りの枇杷があった。２つ食べ、２つをポケットに入れた。冷蔵庫で冷やして、朝のデザートに、と考えたのである。

ホテルへ帰る送迎バスの列に並んでいた。隣はアナウンサーのＡさん。森林・環境分野の委員会で、たまに会う。最近の委員会は女性委員が多い。自分が委員の時は余裕もないが、単なるオブザーバーとして後列にすわることもある。その時は、誰か一人、贔屓の委員を決める。Ａさんを選んだこともある。がんばれ、がんばれと応援する。委員会が終わると、どっと疲れる。しかし、この疲れは気持ちがいい。時間もすぐにたつ。スポーツでも、贔屓のチームや選手がいない試合など、ばかばかしくて見ていられない。

Ａさんに、「枇杷食べましたか」と聞いてみた。「あら、枇杷あったのですか」。これだから事前に、「千葉県に来たら、枇杷ですよ」、と言っておけば良かった。山盛りの枇杷が目に入らなかったのだろうか。ポケットから２つ枇杷を取り出し、「差し上げます」。ホテルの部屋へ帰って、ポケットを裏返し、枇杷から落ちた細かい毛の掃除をした。新調した背広である。美人に弱い性癖を反省しながら、この作業に時間をかけた。

最近の「女子アナ」の選考基準は、才色兼備である。Ａさんは、「元女子アナ」。民藝館の枇杷を一緒に見た人は、「元祖女子アナ」。この 50 年で、採用基準は変わったのだろうか。変わっていない、と思いたいのは、「贔屓目」だからだろうか。

（公益社団法人　大日本山林会）